

553.574 : 550.8 (521.73)

丹波地方の炉材珪石調査報告 各説 その四——
 柏原山地区, 鴨内地区及び鴨庄地区

岩 生 周 一* 岡 野 武 雄**

Résumé

Fire-Brick Silica Stone Deposits in the
 Tanba District, IV.—With Special Reference to the Deposits in the Kai-
 bara, Kamouchi and Kamoshō
 Area

by

Shuichi Iwao and Takeo Okano

In this report, the characteristic geologic features of the deposits in the area are emphasized compared with the other areas in the Tanba district, and with several illustrations.

Mining features are also briefly summarised in the accompanying table.

1. 柏原山地区

この地区はいわゆる多紀郡地区の鉱床帯の西方延長の末端を占めるものであつて、地質的に多紀郡地区と類似の関係にある。地区の特徴として挙げらるべきものは次の通りである。

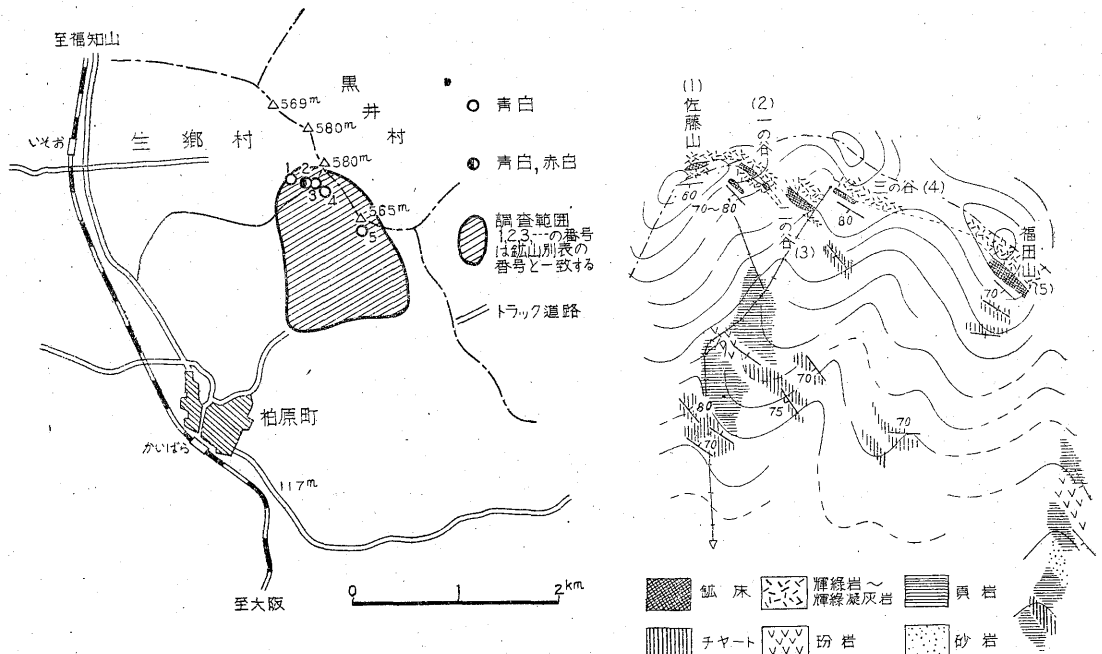
a) 特徴

1°. 地質と鉱床との構造的関係は多紀郡大芋村雲地区と類似しており、比較的簡単であつて、一部(佐藤信次山等)を除いては全般的に探鉱方針が樹て易い。

2°. それぞれの鉱床の規模は酒梨・畑等と略々類似しており、地形的に畑式の坑内探鉱を行うことは鉱石品位がいま少しく良好ならば可能である。

3°. 戦時中相当量の出鉱をみ、上鉱もかなり出したといわれるが、現在は上鉱はほとんどみることができず、概ね平均品位が低下している。

4°. 鉄道に近いに拘らず、鉱床の賦存箇所は山嶺に近



第1圖 柏原地区 珪床分布圖 (岩生 1949)

* 珪床部非金属課長

** 珪床部

く比高 300 m にも達し、労務者の通勤、鉱石の搬出に恵まれていない。このように高所に賦存する珪床はこの

附近(若狭,飯盛を除く)ではほかにみることができない。

b) 鉱床の分布と地質(第1図参照)

地層はほとんど垂直, NW-SE の走向を示し, 鉱床も略々この方向に従つて配列している。地層は見掛上南西側に粘板岩および珪岩を主とするもの, 北東側に珪岩および輝緑岩を主とするものがあり, 鉱床は主にこの輝緑岩~輝緑凝灰岩と相伴つて産する。

構造的に二つの顕著な事実が認められる。すなわち, 一つは地層の走向, および鉱床の配列が, 多紀郡の主体を成す部分の東西性方向から彎曲(または折れて?) NW-SE 方向に変つていること。ほかの一つは鉱床が一見雁行状に並列してみえる事実である。またこの雁行状の配列が鉱床の原位置を示すものか, あるいは後の断層によるものか不明である。

断層または走向断層と, これを横切るものがあるが, いずれもそれ程顕著でない。走向断層は南落しのものが多く, そのあるものは15°~20°の緩傾斜を示している。

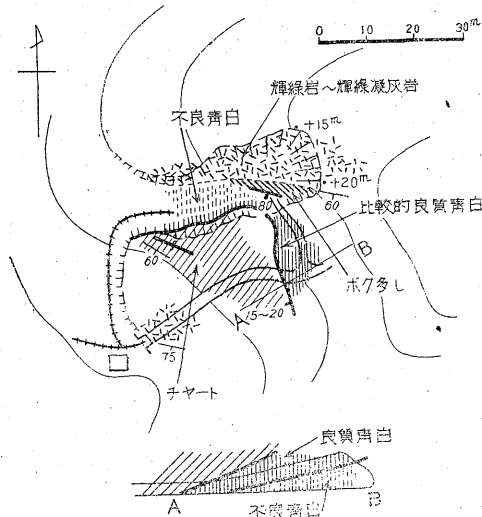
c) 鉱床および鉱石

前例に倣つて次に赤白, 青白の区別, 品質別, 鉱床の規模, 現況等を表現する。(第1表参照)

鉱石は青白を主とし, 若干赤色を伴う(一の谷・福田山)もので概ね2級品に属し, 角礫と脈石との区別が鮮明でないもの, または角礫の色が何となく淡く, 全体がボケた感じのものが多い。

なおこの地区および鴨内・鴨庄地区の鉱石の化学分析および耐火度試験結果を第2表に示す。

1) 佐藤信次丁場鉱床(第2図参照) 柏原山鉱床群の



第2図 佐藤山丁場鉱床図(岩生 1949)

西北端に位し, 灰色チャートを上盤とし, 輝緑凝灰岩輝緑岩を下盤とする青白の鉱床であつて, 下盤側の一部に著しい「ボク」を伴う。また上盤のチャートとは15°~20°の西落し緩傾斜断層で境しているようであつて, 鉱体は意外にその大きさが縮められている。

鉱石は一般に灰緑色チャートに移化するとき外観を示し, 2級またはそれ以下のものを主とし, 一級に相当するものは稀である。

2) 一の谷鉱床 西北一東南方向に延びた垂直の鉱床であるが, 現在は坑道が埋没し, 露天掘跡も土砂で埋まり, ほとんど鉱石の実態をみることができない。現在僅かに盤際に残っている鉱石は青白, 赤白共に素地と脈石英との区別の不明瞭なもので2級品に相当する。

両盤は輝緑岩・輝緑凝灰岩である。柏原山では尤も規模が大きいらしく, 既知延長約100mに達する。

3) 二の谷鉱床 既知延長35m 最大幅15mのNW-ESに延びた垂直レンズ状鉱床である。見掛上の下盤には灰色チャートを距てて輝緑岩輝緑凝灰岩が発達する。上盤には「ボク」がみられる。

鉱石は青白である。

4) 三の谷鉱床(第3図参照) 二の谷鉱床の略々ES方向の延長上に稍々ヅレて雁行状に配列した鉱床である。二の谷鉱床との関係は, 両者の距離50m以下であるに拘らずこの間に露出がなく不詳であるが, 鉱床中の小断層の構造から推定すると東側が北方にズレている傾向が認められる。

鉱床は二の谷と類似の形状を呈し, 下盤は輝緑岩・輝緑凝灰岩に接している。上盤または顕著な「ボク」を伴う。

現在採行中の鉱石は概ねチャートと漸移する感のある2級程度であるが, 部分的に1級品を混えることがある。

5) 福田山鉱床 一の谷鉱床と同じようにNW-ES方向に長く延びた鉱床であるが, 厚さは5m内外である。見掛上の下盤は輝緑岩輝緑凝灰岩, 上盤は「ボク」, チャートを距てて粘板岩・千枚岩等に接する。また, 鉱体の一部は傾斜40°, 70°, 20°等の小断層で細かく截られている。

現在坑内の一部および坑外の残鉱によつて鉱石をみると, 青白を主とし, 部分的に硫化鉄の薄板状フィルムを伴うが, 品質はそれ程悪くない。唯「虫喰い」がみられるのは著しい欠点である。一部赤白を伴う。

明らかに往時の採掘鉱石と思われるものが, 鉱床の東南方谷間に散見でき, この中には赤白の比較的上鉱が認められる。

6) 福田山東南方 福田山東南方谷間には赤白のかな

第1表 柏原, 鴨内, 鴨庄地区

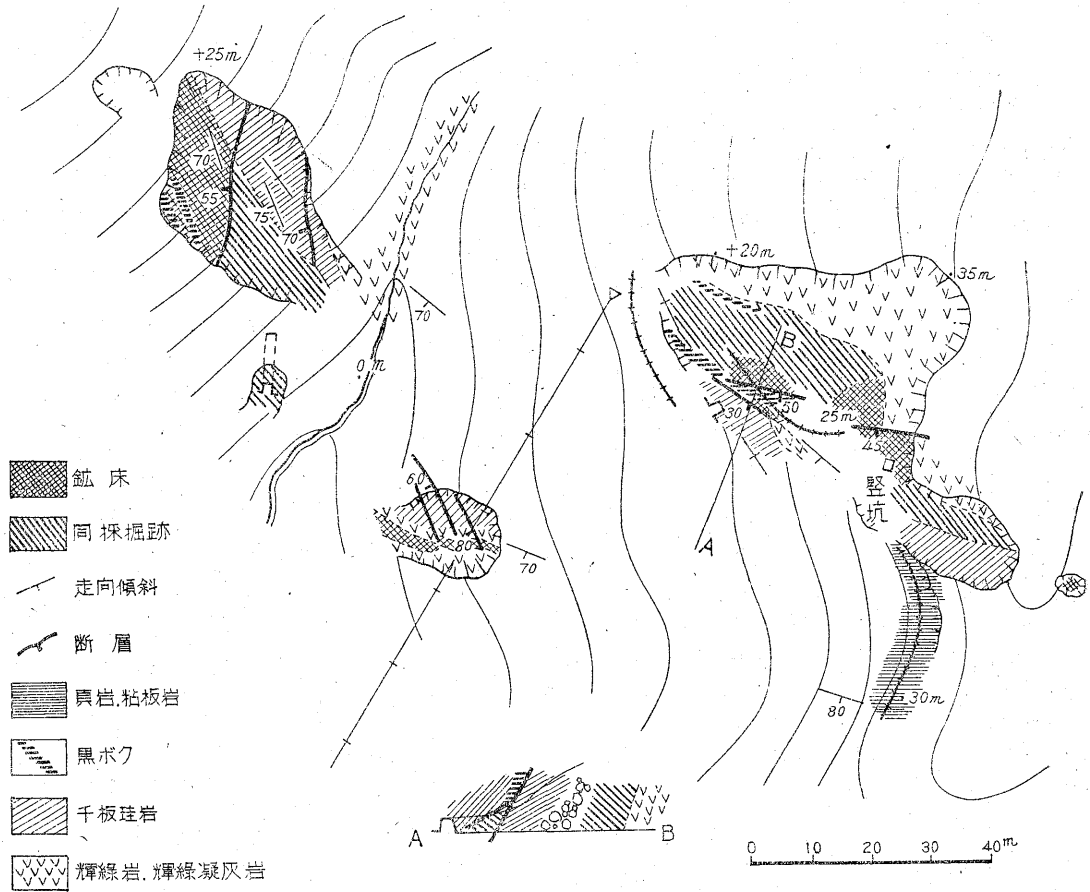
	番号	鉱山名又は丁場名	業者名	鉱石		鉱床 形, 規模
				種別	その他	
柏原地区	1	佐藤山	佐藤 信次	其他 (青白に近し)	10%粉鉱	断層により横臥レンズ状 20m×20m×5m 以上
	2	一の谷	柿原 珪石	青白, 赤白2級		6m×80m? ×15m 以上
	3	二の谷	"	青白2級		10m×35m×20m 以上
	4	三の谷	"	青白2級, 其他, 1級を混えることあり		10~5m×70m×20m 以上
	5	福田山	"	青白2級 (一部赤白を伴う)	虫喰いあり	1~5m×70m×20m 以上
鴨内地区	1	?	?			
	2	?	?			
	3	芦田文兵衛山	芦田文兵衛	青白		
	4	鴨内蔭谷	芦田 林藏	赤白, 青白2級及び2級以下	朱赤多し 多少フリント質	{ 目多く4~50%粉鉱 3m×15m×5m以上(上方) 4m×10m×x以上(下方)
	5	富士珪石山	富士 珪石	青白2級以下	フリント質	3m×10m×5m以上
	6	品川一号山	品川白煉瓦	青白2級以下	フリント質	4m×15m×5m 以上
		" 二号山	"	青白2級以下		2~4m×10m×5m以上
	7	宮垣一号山	宮垣 博	赤白, 青白2, 2級以下	朱, 青多し	4m×10m×5m 以上
	8	宮垣二号山	宮垣 博	青白2級上		5m×3m×5m 以上
	9		宮垣 博	青白2級以下	フリント質	小規模
	10		白 井			
11	由良山	白 井				
鴨庄地区	1	上垣山	柿原 珪石	赤白, 青白2級?	変化に富む	小規模
	2					
	3	加賀山岩戸	加賀山鉱業所	(硫化鉄を伴う) 青白1, 2級	一部目多し	{ 断層により複雑化 10m×5m×5m<5mの小塊状鉱床の集まりとなる
	4	富士岩戸	富士 珪石	赤白2級	一部石灰質, 赤強し	{ 断層により分れる 3m×20m×10m 以上
	5	山名岩戸	山名 珪石	赤白, 青白2級上	多少ボケ, 青赤強し	1.5m×15m×15m 以上のもの2枚
	6	加賀山上牧	加賀山鉱業所	青白?	?	4m×30m×15m 以上
	7	三木上牧	三木 珪石	青白2級上	青強し	2m×30m×5m以上
	8		大谷 重工	?		
	9		"	?		
	10		"	?		

注: 上記鉱量の計算は2級または2級下程度の鉱石も現在より少々無理な採掘方法によるも採算がとれる

鉱床別一覽表 (岩生) 1949 年現在

傾 斜	既採掘量	鉱 量	採掘方法	索 道	産 額	労務者	そ の 他		
断層により見掛け 20°	0.3 万 t	}	かつて露天坑道	2カ所中継合計 960m	50~60 t/m	6 人	坑道延長 40 m		
垂直	1.3 "		露天, 坑道	300m, 28° L	休				
70°SW	1.0 "		露天		休				
70°~80° S	1.3 "		露天, 坑道	550m, 24° L 300m, 19° L	}	100 t/m	12~13人	坑道延長 15 m	
70°~90° S	0.7 "		露天, 坑道						昭和18年以後休
計 約 5.0 万 t		約 5.0 万 t	内訳 {1級 0.5 万 t 2級, 2級以下 4.5 万 t						
30° NE } 40° NE }	1, 000t ?	}	半露天	260m, 20° L	100 t/m	6 人	かつて 300 t/m 出鉱24年7月再開		
30° NE			露 天		100 t/m	6 人	赤白 10 %以下混ざる。		
50° NE			露 天		120~130t/m	8 人	}	6~7人	角礫の周りに硫化鉄の縁取り 3 鉱体
40° EN			露 天						
40° NE			半露天		140~150t/m	6~7人	}	6~7人	
40° NE			半露天						
40° NE	露 天								
計 約 1 万 t 以下		5 万 t 以下							
{ 全体として30°N	0.05万 t	}	露天	?	?	5 人			
	{ 全体として30°N		0.08 "	半露天	木馬道	60 t/m	7~8人	粉約30~50% 24年1月より稼行	
			10° W	0.05 "	半露天→坑道	木馬道			24年3月より稼行
	25° W		0.05 "	露天, 坑道	木馬道	100~50 t/m	3~4人	23年1月より稼行	
	{ 全体として15° NW		0.2 "	露天, 坑道	300m	休			
	0.05 "		露天, 坑道	160m	60 t/m	7 人	23年12月より稼行 粉約 20 %		
計 約 0.5 万 t (相当量)?									

状況におけるものである。また数字は大部分推定および予想の合計である。



第3圖 三の谷丁場鉱床圖 (岩生1949)

第2表 柏原, 鴨内, 鴨庄地区分析試験および耐火度試験結果(1949)

番号	品 質	産 地	耐 火 度		SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	CaO	MgO	Ig. loss	計
			単味	スラッグ入								
126	青白赤白 2級	柏原山一の谷	34	32+	98.66	0.24	0.81	0.01	0.04	0.06	0.19	100.01
127	青白 2級以下	柏原山佐藤山	34	32	96.83	0.50	1.63	0.04	0.01	0.12	0.32	99.45
130	青白 2級	柏原山三の谷	33	32	97.10	0.23	1.36	0.00	0.03	0.12	0.51	99.35
133	青白, 赤白 2級以下	福田山坑内	34	32+	98.357	0.18	0.97	0.01	0.02	0.04	0.13	99.92
137	青白 2級以下	鴨内品川2号坑	34-	32 ¹ / ₂	98.37	0.20	1.07	0.01	0.01	0.05	0.24	99.95
139	青白 2級上	鴨内宮垣2号山	34	32 ¹ / ₂	98.83	0.31	1.10	0.04	0.01	0.08	0.53	99.90
140		鴨内上蔭谷	34	32 ¹ / ₂	98.14	0.49	1.40	0.01	0.01	0.08	0.07	100.05
135	赤白 1級	福田山中部露頭	34	33								
136	青白 2級以下	鴨内富士坑	33	32								
144	青白 2級以下	鴨内芦田2号山	32 ¹ / ₂	31 ¹ / ₂								

化学分析: 地質調査所分析課 耐火度試験: 黒崎窯業研究課

り良鉱の轉石が認められるが, その源は詳かでない。

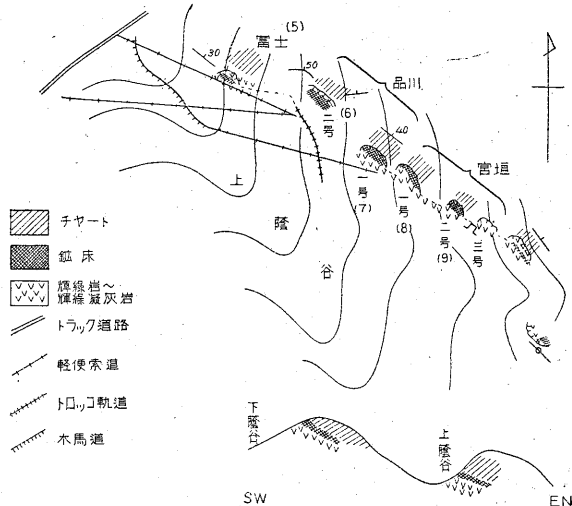
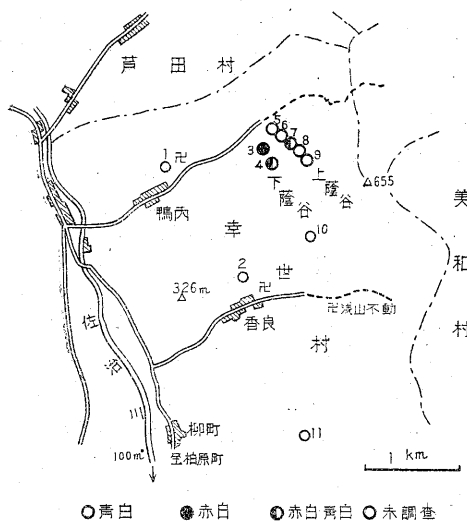
探鉱を畑山と同様な方法で行い新鉱床を地下で発見す

d) 生産等に関する見直し

輝綠岩~輝綠凝灰岩とチャートとの境界に沿つて坑道

ることは理論的に可能であるけれども, 鉱床の賦存箇所

が余りに高いこと, 動力機械設備を新設する必要のある



第4図 鴨内地区・鉍床分布圖(岩生1949)

第3表 柏原, 鴨内, 鴨庄地区業者一覽表 (既載の分を除く)

業者名	住所
佐藤 信次	兵庫縣水上郡生郷村石負
宮垣 博	兵庫縣水上郡幸世村方町
臼井 某	兵庫縣水上郡幸世村井中
柿原珪石鉍業所	兵庫縣水上郡柏原町柏原
大谷 重工	

こと、鉍床の規模はかなり大きい品質が必ずしも充分によくないこと等からみて現状では大規模の開発には不適當である。しかし良質級品の供給地としては重要である。

探鉍方法としては現在行われているように坑道による既知鉍床の下部探鉍に主力が注がるべきであろう。

2. 鴨内地区

a) 特徴

鴨内地区においては富士珪石・品川白煉瓦・宮垣氏等により稼行され、丹波地区の最西端の独立した一小地域をなしている。地区の特徴としては

- 1° 本地域の鉍床群は鴨内村上蔭谷と下蔭谷に二別して考える。
- 2° 上蔭谷の鉍床群は、角礫の部分か青味を帯びた半透明なフリント質で脈石英の部分との境の不明瞭な青白珪石を主とし、下蔭谷の鉍床群は有色部分の多い赤白青白珪石で、硫化鉄に富む。また時に角礫が朱色含赤鉄玉隨質縁取りで囲まれる。
- 3° 一鉍体の大きさが余り大きくはなく、しかも坑内

掘で相当に開発されているために今後の採掘に困難を感じる。

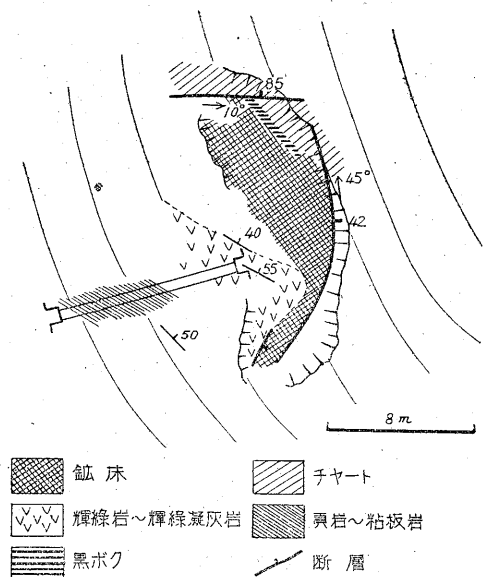
- 4° 搬出は木籠または輕索により貯倉に送り、約20kmの路をトラック運搬し、石負駅に送るため、小運搬費がかなり大きな部分を占める。
- 5° 今後一時に多量の出鉍は期待できない。
- 6° 構造は酒梨と類似しており、理論的には酒梨と同様の坑内探鉍が効果があると思われるが、業者が入り混つており、鉍石品位がそれ程よくないのでかゝる探鉍方式の適用にはこの場合限度がある。

b) 地質・鉍床および鉍石(第4図参照)

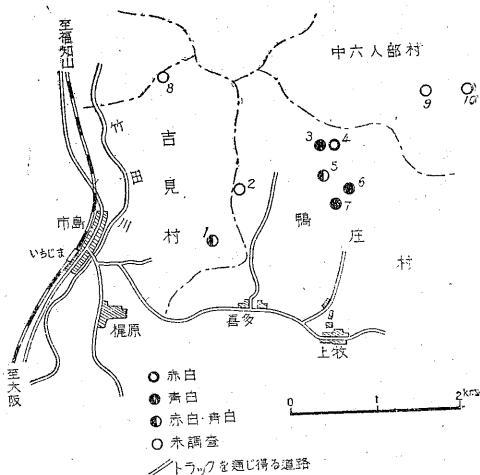
地質は酒梨附近の西方延長に相当し、地層の走向N40°~60°W、傾斜30°~60°Nであつて、砂岩・千枚岩・チャート・輝綠凝灰岩よりなり、鉍床の存在する層位も、酒梨附近と同一と推定され、上盤はチャート、下盤は輝綠凝灰岩で両者の間に滑り面で境されて鉍体が夾在する。鉍体は厚いレンズ状で、これを寸断する小断層によりしばしば不規則な塊状を呈する。各鉍体の大きさは区々であるが、概して酒梨より規模が小さい。鉍石は上蔭谷においては青白珪石で、角礫は半透明、脈石英との境は不明瞭、いわゆるフリント質で2級品を主とし、1級品を混える。赤白珪石といえるものも伴うが、少量で、脈石英の部分少なく、かつ石目が発達し細鉍となる。下蔭谷においても、赤白・青白珪石の脈石英の部分が少ない、2級品を主とする。これも石目に富み細塊となり易く、硫化鉄の結晶に富むことが多い。

鴨内地区の出鉍量は500~600 t/mである。

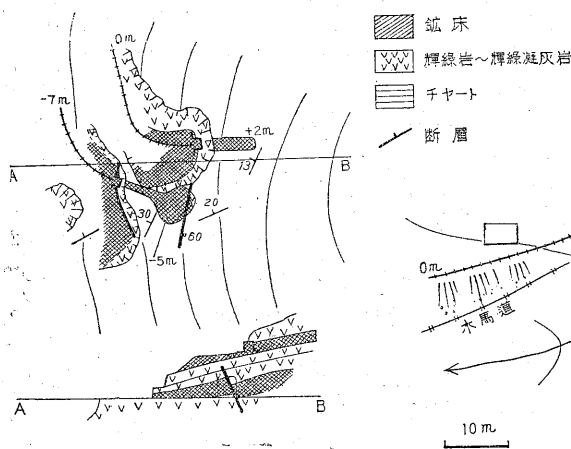
(1) 富士鴨内山鉍床 鴨内地区一群の鉍床のうち、最



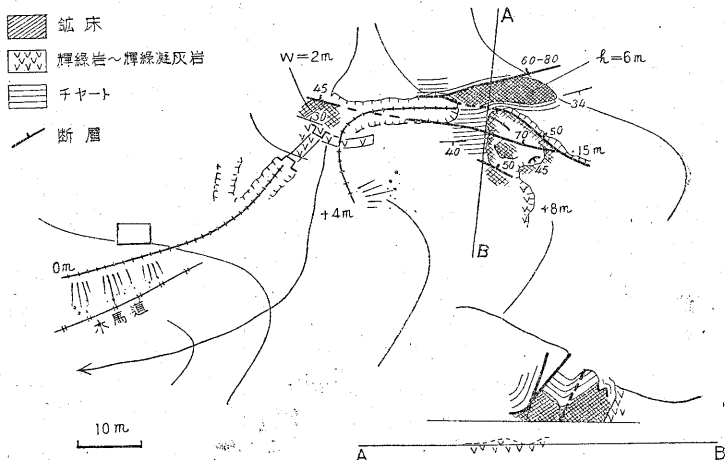
第5圖 宮垣一號鉾床山 (岩生 1949)



第6圖 鴨庄村鉾床分布圖 (岩生 1949)



第7圖 山名岩戸山鉾床圖 (岩生 1949)



第8圖 加賀山岩戸山鉾床圖 (岩生 1949)

西北端に位し、輝綠凝灰岩中に存在する厚レンズ状鉾床である。鉾床の走向は $N 30^{\circ} \sim 40^{\circ} W$ 、傾斜 $50^{\circ} E$ に落す。幅 $1.5 \sim 2.0 m$ 、長さ $15 \sim 20 m$ のもので上盤側には Mn 分による焼けを生じている。

鉾石は青白珪石で緑色の部分が多く、珪酸分に富んだものである。この鉾石はいわゆる青白珪石とは異り、青角礫の部分は微晶のフリント質で脈石英の部分との境の不明瞭なもので、いわば青味を帯びた白珪石ともいえる。2級品を主とし、一部に1級品を伴う。

出鉾は最高月 $200 t$ で、大阪製業に送られる。

(2) 品川鴨内鉾床 富士鴨内鉾床の東南に位する。上盤チャート、下盤輝綠凝灰岩との境の脈状またはレンズ

状の膨縮する鉾床で、夾みを距ててその上部は $1 \sim 1.5 m$ の良質鉾、下部は $1 \sim 2 m$ の不良質鉾から成っている。鉾床の走向 $N 30^{\circ} \sim 40^{\circ} W$ 、傾斜 $30^{\circ} \sim 50^{\circ} EN$ 、方向不定の断層により囲まれている。丁場は2カ所あり、二号坑は露天採掘跡に下部より立入掘進中である。一号坑のみ採掘中。上部の良質鉾は富士鴨内鉾床の青白珪石と同じもので $1 \sim 2$ 級品、下部不良鉾は赤チャート中に脈石英の入ったものである。

出鉾量は月 $100 t$ 前後。

(3) 宮垣鴨内鉾床(第5図参照) 品川鴨内鉾床の東南に位する。下盤は千枚岩・千枚岩質輝綠凝灰岩、上盤はチャートである。鉾床はレンズ状で断層によつて二方を

囲まれている。4つの丁場があるが、丁場相互間の鉱床の関係は明らかでない。鉱床の走向および傾斜はいずれも品川鴨内鉱床と同じである。

鉱石は前記の鉱床群と同じ青白珪石であり、特に二号坑におけるものは良質で1級品であるが、全体としてみれば2級品の良いものといえよう。

この一乃至四号丁場の奥にかつて採掘した掘跡がある。この鉱体は厚さ2m余におよび比較的大きいが、鉱石はいわゆるフリント質で、玉随質石英よりなると思われる。

(4) 芦田文兵衛山鉱床 上記一群の南方高所に位置する休山中の鉱床である。轉石によると鉱石は青白珪石であるらしく、かつてかなり出鉱したという。

(5) 芦田林蔵鴨内下窪谷山鉱床 上盤は珪化されたチャート、下盤は千枚岩化された輝綠凝灰岩であつて、鉱床は脈状またはレンズ状、傾斜はかなり緩く、走向は北西東南、鉱体の厚さは約6mである。鉱体内には石目が発達し、細鉱になり易く塊鉱の歩留りは小さい。因に細鉱塊鉱の比率は、5:5~7:3である。

鉱石は赤白珪石と青白珪石と共に主として2級品である。鉱層の上部に赤い部分が多い。また比較的硫化鉄に富み、0.5m大の結晶をみることがある。Mnも多少伴う。この鉱石は細鉱になり易いことが欠点である。

出鉱は150~200t/Mで、鉱石は九州に送られる。

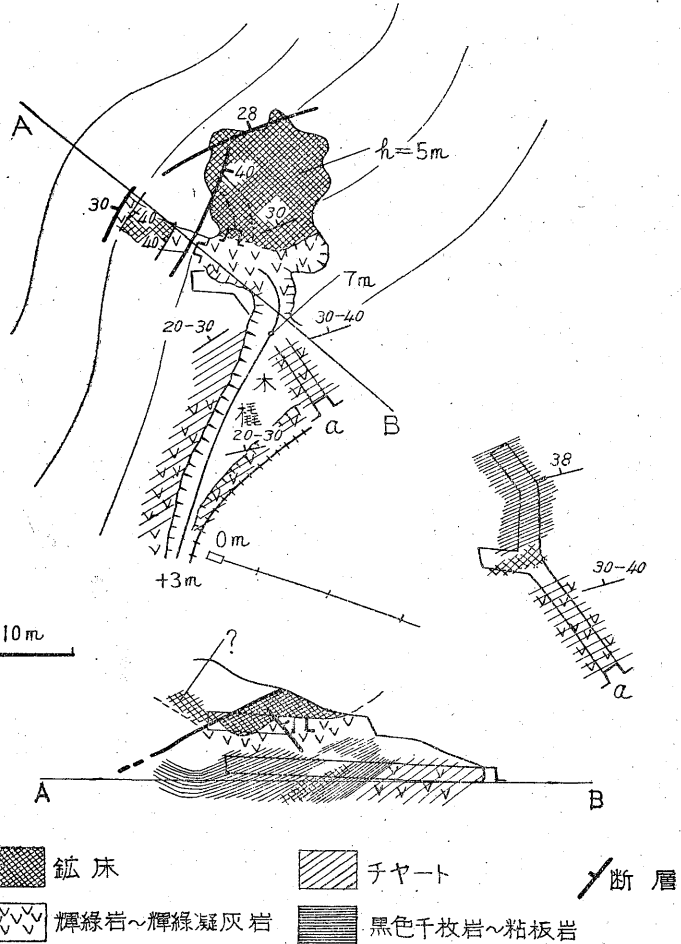
c) 生産等に関する見直し

開発の初期から丁度中期に入ろうとする階程にあり、今後は既知鉱床の下底部へ向つての斜め掘り、あるいは立入坑道による下部の探鉱と開発に向わざるをえないであろう。しかし平均品質がそれ程高くないので、この方法をどの程度推し進めようかは問題であり、従つて飛躍的増産を期待することは現在の需給関係からは困難であろう。

3. 鴨庄地区

a) 特徴

この地区には現在5~6カ所に採掘丁場がみられる。各丁場間の地質を調査する暇がなかつたので、各鉱床相互の関係を述べることはできない。



第9圖 三木上牧山鉱床圖 (岩生 1949)

特徴としては鉱石に品質の斑の多いこと、市島、酒梨地区のものに比しそれぞれの鉱床の規模が小さいこと、最近再開した鉱床が多く従つて開発がまだそれ程進んでいないことである。

鉱石搬出も富士岩戸を除けば比較的恵まれている。

b) 鉱床の分布 (第6図参照)

鴨庄村岩戸附近に5丁場が群集し、少々離れて吉見村天神附近に一・二の丁場がみられる。

c) 鉱床及び鉱石

赤白、青白の区別、品質別、鉱床の規模、現況等を次に表記する。

(1) 山名岩戸鉱床(第7図参照) 厚さ約1~1.5m、程度の緩く西に傾いたレンズ状鉱床が約5mの上下間隔をもつて2枚重なり合っている。いずれも上下盤は輝綠岩輝綠凝灰岩であつて、一部黒ボクを伴う。

脈石英と素地との境が時々不明瞭な青白2級品を主と

し、一部赤白を伴う。

坑道浅く鉱床の全体の規模はまだ明らかでない。

(2) 加賀山岩戸鉱床(第8図参照) 輝緑岩・輝緑凝灰岩と灰色チャートとの間に介在する青白珪石の鉱床である。多くの小断層によつて鉱体が寸断され複雑な小塊状鉱体に分れているが、全体としての鉱体の厚さは4~5m程度、青白の1級品を主とし、部分的に3級品またはチャートに移化する部分等を伴う。また微量の白鉄鉱の薄層を夾むところがある。

断層の影響により鉱石の割目に富む部分が多く、約50~30%は粉鉱となる。

(3) 富士岩戸鉱床 厚さ約3m、両盤が赤色チャートの東西に延びた赤白珪石の鉱床である。鉱体に並行な一種の階段状断層によつて北側が落ちているものようである。一部に「ボク」を伴う。

石灰質(素地)のもの、良質のもの等が不規則に入り混つていて、品質が一定しないのがこの鉱床の欠点である。

露天より坑道掘りに切換え中である。

鉱床の規模はまだ不明であるが、余り大きなものとは思えない。

(4) 三木上牧鉱床(第9図参照) 下盤が輝緑岩・輝緑

凝灰岩に接し、厚さ約1~3m 北西落しの鉱床であるが、その西縁は寧ろ逆落して鉱体内に小さい向斜構造が推定される。また断層により鉱床が繰返されている可能性がある。

青白2級品程度の鉱石を主とし、割目に富む部分を若干伴う。

5) 加賀山上牧鉱床 輝緑岩・輝緑凝灰岩中に介在する西落しのレンズ状鉱床である。厚さ約4m、チャート質の部分を混えること多く、全体として品質不良である。

6) 上垣山鉱床 赤色チャートの間に夾まれた小鉱床で、赤白、青白のフリント質、「ボク」等を混える斑の多い鉱床で、品質は2級またはそれ以下である。

a) 生産に対する見直し

この地区はいわば開発の初期にあるもので、今後の見直しを判然とつけるにはさらに地質の精査と、今回の未調査鉱床の調査を必要とするが、品質的に余り恵まれず、それぞれの鉱床の規模が比較的小さいので、現下の需給状況からみて著しく生産が上るものとは思われない。しかし鉱床の数は多いし、残存鉱量も全体としては少なくないであろうから、2級品程度の需要が増せば、これには相当程度應じうる可能性は多い。

553.32 : 550.8 (521.52) : 622.1

長野縣木曾鉱山マンガン鉱床調査報告

宮本 弘 道* 林 昇 一 郎*

Résumé

Report on the Manganese Ore Deposits at Kiso Mine, Nagano Prefecture.

by

Hiromichi Miyamoto & Shōichirō Hayashi

The ore deposits occur in the Palaeozoic chert and clayslate; they consist of small échelon typed bodies on the scale of 30m × 15m × 2m.

The principal ore forming minerals consist of tephroite, rhodochrosite, rhodonite, pyrolusite, psilomelane, etc.

要 旨

昭和25年5月19日より昭和25年6月4日に亘り概査した木曾地方のマンガン鉱床の一つに木曾鉱山の鉱床がある。本鉱山は長野縣西筑摩郡木祖村簸原鉢伏國有林内にある。鉱床は古生層中のチャートおよび粘板岩の互層中に胚胎し、雁行状に配列する小鉱体の集りよりなり、走向略々NS、確認された延長30m以上、最大鐘幅2mで、小鉱体中には延長15m以上に達するものがある。鉱石は酸化鉱およびアヅキ系統の炭満が主で、その構成マンガン鉱物はテフロ石、菱マンガン鉱、バラ輝石、軟マンガン鉱、硬マンガン鉱等である。

今後の探鉱は稼行鉱床の北延長部の鍾押探鉱で、一・二の小鉱体の発見は期待しうる。

1. 鉱 區

登録番号 長野縣試掘 4,852

鉱 種 マンガン

* 鉱床部